

児童の仲間集団形成に及ぼす遊びの役割

調査法の試み

渡辺 広人・松崎 展也

(愛媛大学大学院教育学研究科)

佐藤 公代

(教育心理学教室)

(平成15年10月23日受理)

The role of the play to exert on the pal group forming by the child

Trying Investigation Method

Hiroto WATANABE, Nobuya MATSUZAKI and Kimiyo SATOU

I 問題と目的

今の子どもたちの多くは、本来、幼少期に培われる対人コミュニケーション能力等が形成されないままに成長してきている。その背景には、「遊び場所がない空間」「遊ぶ時間がない」「遊び仲間が不十分」の問題点が考えられる。さらに、主たる養育者である母親の自由時間の増大が逆に、少しでも、我が子には他者よりも秀でた存在になってほしいと熱心に養育していくあまり、幼少期にたっぷり遊ばせる等の体験を知らず知らず奪っていくという風潮も拍車をかける。そのような中で、本来習得されるべき対人コミュニケーション能力や耐性をも欠如させられてしまう。特に、児童期に入り、大半の時間を過ごす学校という生活空間では、学習することが絶対になる。家庭に帰ってもそれに縛られてしまう。そのため、子どもたちの自由時間は削られていく。このような中で当然のことながら、耐性不足、いろいろなストレスに対する対処の不適切さも現れる。ひいては、いじめや不登校など行動上の問題をも大きくし、同時に問題解決を遅らせている現状もある。少なくとも、学校現場における遊びの保障をしてやることが少なからず、子どもたちの人格形成において重責を果たすものと考えられる。遊びを通してよりよい仲間集団を形成していく中で、過去に培うべきさまざまな能力をも再生されるものと期待できる。

そこで、学校の中での遊び、特に集団遊びを保障してやることで、他者との触れ合いの中でお互いを思いやる気持ちや過去に培われるべき社会性等の能力の高まりを期待することができるものと考えられる。それらの個々人の能力を高めることが学級集団の支持的風土作りへの一

助になるものと思われる。

そこで、「遊びの経験が豊富な子供たちほど、思いやりの気持ちや社会的スキルが高いのではないか」という仮説のもと分析することにした。

Ⅱ 方 法

対象者：S 小学校 5 年生 32 名（男子 17 名，女子 15 名）。

調査期日：2003 年 5 月

調査内容と手続き：以下の 1 から 3 の各質問紙を中心に，各自の遊びの仲間，空間などの実態に関する質問を加えた質問紙冊子を作成した。「小学生の生活の仕方について，自分自身を振り返り，よりよい仲間集団の一員になるための一つの資料」を収集する目的として説明し，無記名式で回答を求めた。

Ⅲ 結果及び考察

1 質問紙の構成

(1) 遊び能力尺度

児童の生活の中で，余暇の過ごし方の大半は遊びに費やされている。今までの生活経験の中で培われた遊びに関する能力について，個人差はあるにせよ全体として高学年の児童の実態を把握することにした。特に，集団遊びにおける他者とのやりとりの中での協力性や創造性，積極性，規則の遵守性などの全体傾向をつかむため，計 14 項目を用意した。なお，遊び能力尺度として森嶺（1982）が作成したものを参考として児童向けに修正し，使用した。質問紙の冒頭には以下の説明を前書きとして掲載した。「遊びについてくわしく教えてください。自分の遊んでいるときのことを思い浮かべてアンケートに教えてください。それぞれの質問の内容をよく読んで（あ）（い）（う）の 3 つの中から自分にあてはまるものに をつけてください。」

得点化においては，（あ）を 1 点，（い）を 2 点，（う）を 3 点の 3 件法として処理した。

(2) 向社会的行動尺度

児童は，他者とかかわりながら毎日の生活を過ごしている。当然ながら，相手の立場になって考え行動することも必要となる。今までの生活の中での他者に対する思いやりの気持ちの実態についても把握することにした。特に，児童の生活場面を想定し，計 12 項目を用意した。なお，向社会的行動尺度として菊池章夫（1988）が作成したものを参考として今の時代に適した内容に修正し，使用した。質問紙の冒頭には以下の説明を前書きとして掲載した。「ふだんの生活について思い出して教えてください。下の 4 つの中から 1 つ選んで をつけてください。」

得点化においては，1 を 1 点，2 を 2 点，3 を 3 点，4 を 4 点の 4 件法として処理した。

(3) 社会的スキル尺度

児童は，生後，現在までいろいろな人たちとかかわりながら生活してきた。その生活場面で培われた対人コミュニケーション能力について，個人差はあるにせよ全体として高

学年の児童の実態を把握することにした。特に、生活を共にする友達との生活場面の中での協調性や道徳性などの全体傾向をつかむため、計36項目を用意した。なお、社会的スキル尺度（児童版）として庄司一子（1991）が作成したものを参考として使用した。質問紙の冒頭には以下の説明を前書きとして掲載した。「ふだんの学校生活について思い出して答えてください。下の4つの中から1つ選んでをつけてください。」

得点化においては、1を1点、2を2点、3を3点、4を4点の4件法として処理した。

2 遊び能力，向社会的行動，社会的スキルの実態について

（1）遊び能力の単純集計結果

図1に遊び能力の実態を示す。ほとんどの児童は遊びを楽しんでいることが分かる。また、より楽しい遊びになるように遊びの内容を理解して参加をしたり、もめごとが起こってもそれを友達と協力して解決したり、みんなが遊びを楽しめるようにルールを工夫したりする能力が培われていることが分かる。また、全体として女子のほうがそれらの能力が高いことが分かる。このことは、精神的な心理面の発達に男子よりも女子のほうが早いことの表れと考えられる。ただ、集団遊びをリーダーとなって引っ張っていく能力については全体として低くなった。これは、発達段階の上で自分自身を心理的に低める時期等の影響を顕著に反映しているものと思われる。

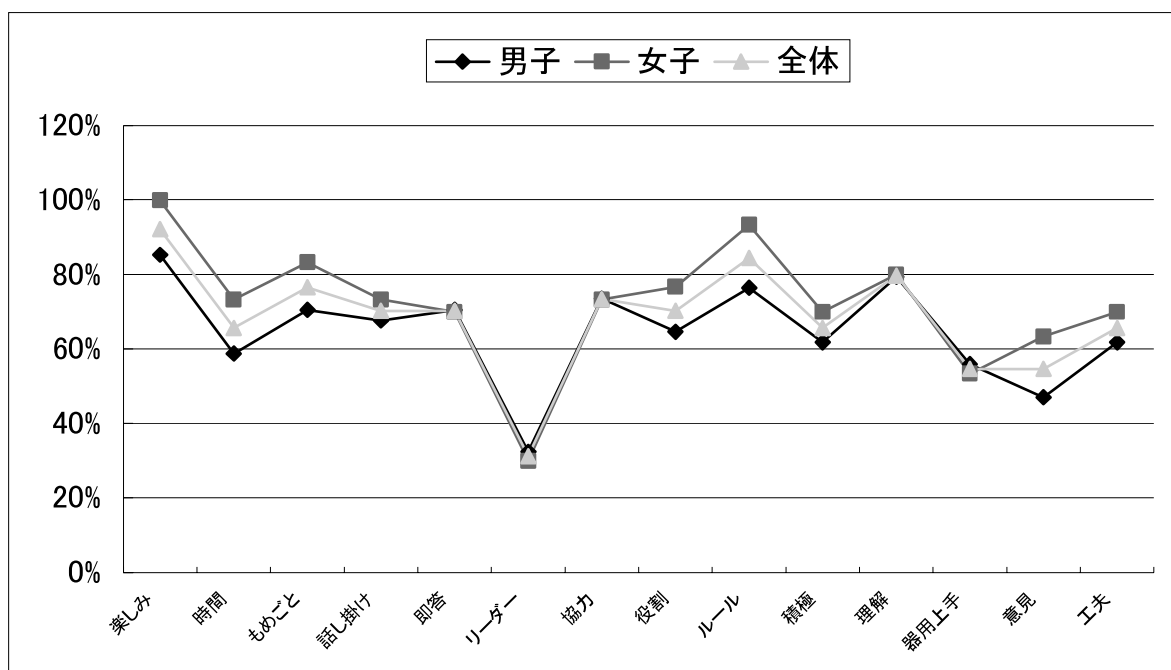


図1 遊び能力の実態

（2）向社会的行動の単純集計結果

図2に向社会的行動の実態を示す。「悲しそうな友達や困っている友達の力になってやる」「友達に頼まれて友達の代わりに仕事をする」「ころんだ子どもを起こしてやる」という項目の数値は高い。やはり、子供たちにとって友達はかけがえのない存在であるし、そ

という状況が発生すればなにをさしておいても、友達のために行動することが分かる。また、「いい物もらったときには、友達や兄弟にも分ける」についても、いいことは他者と共有したいという表れであると思われる。特に、「ころんだ子どもを起こしてやる」という項目については男子のほうが女子に比べて高いことが分かる。そういう場面における男子の特有のヒーロー願望の表れとも考えられる。その他については全体的に女子のほうが優位である。ただ、「けがをしたり気分が悪くなった人を保健室に連れていく」という項目については、保健係の存在等もあり、全員がなかなか経験できない現状からの結果とも考えられる。「気分の悪い友達を家まで送っていく」や「おばあさんやおじいさんの荷物を持ってあげる」という項目については現代の生活場面の中ではなかなか遭遇できないため結果として低くなったものと考えられる。

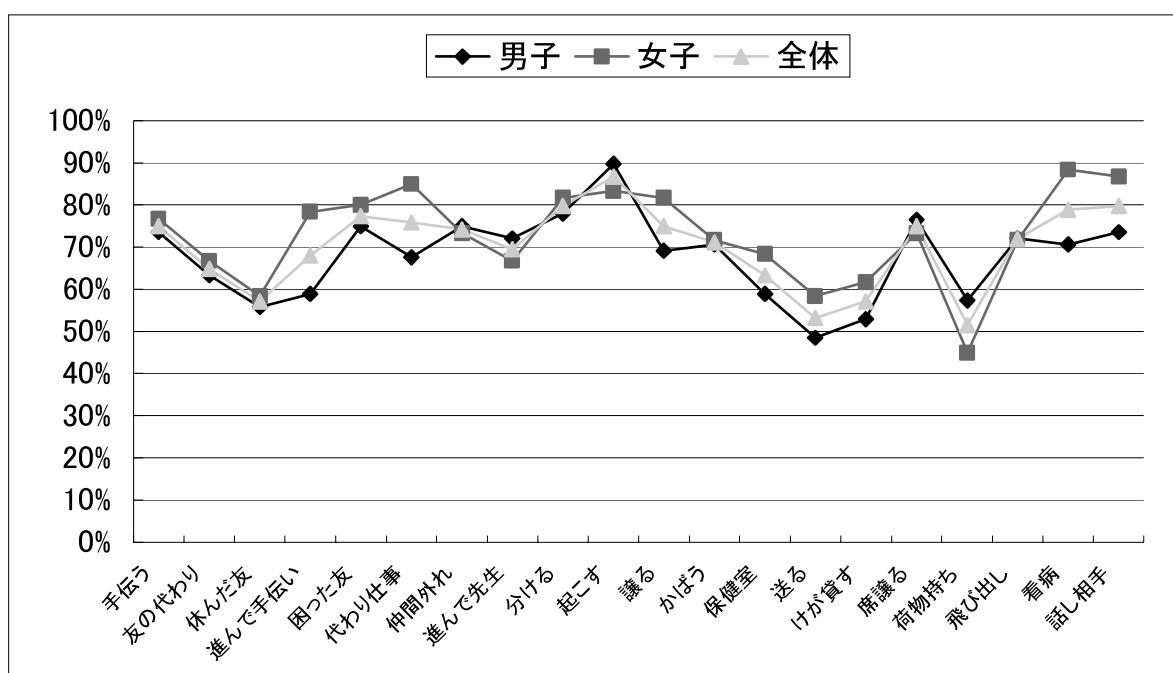


図2 向社会的行動の実態

(3) 社会的スキルの単純集計結果

図3に社会的スキルの実態を示す。「友達に『ありがとう』と感謝の気持ちを言う」「友達が何かうまくしたときは『じょうずだね』などとほめる」「友達に何かをしてもらったときにはお返しに何かをしてあげる」「自分にも悪いところがあると思ったら『ごめんね』などとあやまる」などの項目の数値が高い。やはり、日々の生活の中での友達の存在が個にとって大きな存在であることが分かる。特に、男子よりも女子のほうが数値が高いことは高学年独特の特徴と考えられそうである。同様に、「相手と意見が違ってても、自分の意見を言う」「初めて会った人にも気楽に話しかける」「友達と話をしているときには、冗談を言って話がはずむようにする」などの項目の数値は低かった。これも、高学年特有の傾向と考えられる。ただ、「自分から友達を遊びに誘う」は男子がずば抜けて高くなっている。ある意味、男子の社交性の表れとも考えられそうである。全体としては、やはり女子のほうが社会的なスキルが培われていることが分かる。

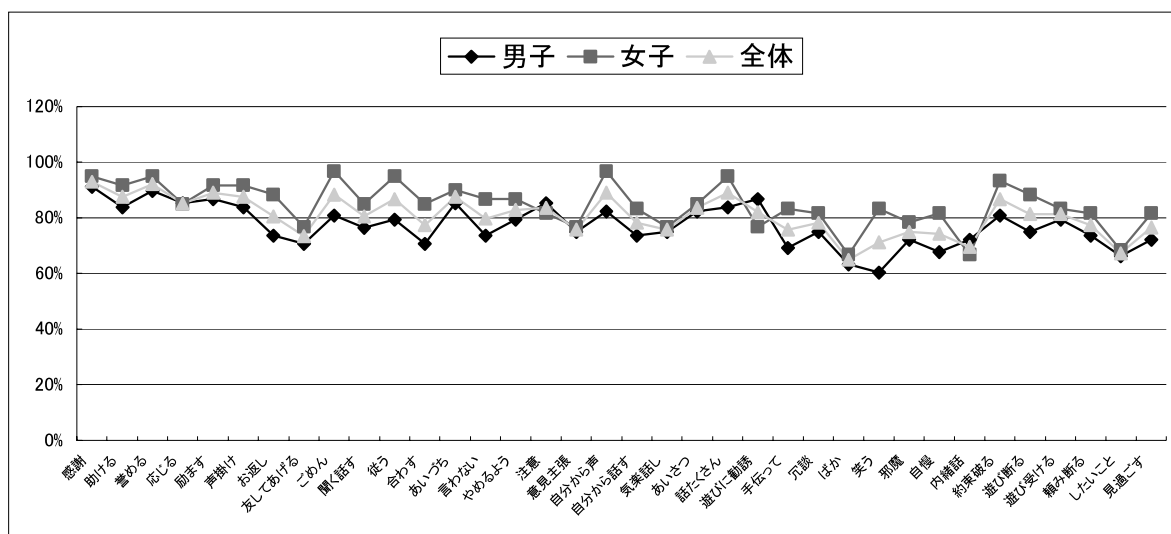


図3 社会的スキルの実態

3 因子分析

(1) 遊び能力状況質問紙の因子分析的検討

Table 1 に遊び能力尺度の因子分析の結果を示す。全対象者のデータに基づいて主成分法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子分析の結果、2 因子解を採用した。

第1因子は、遊びの内容をよりよくし、集団遊びをより楽しく豊かにするための能力と見なせる。やはり、遊びの活動を集団の中で統率するリーダー的な存在の必要性や個々がさらに楽しい遊びのひとつを過ごすことができるような意見を発言したり、工夫をしたりするために必要な力と解釈できる。坂本昇一(1998)によれば、子どもの豊かな成長には、発達課題を適切な時期に身に付ける必要があり、不足している場合には体験を通して補わなければならないと述べている。まさに、リーダー的な存在になれないまでも工夫する点を見つけたり意見を発言したりすることが重要となる。

第2因子は、集団遊びの成員にはいろいろな個性があり、それぞれが一定時間の遊びの中で自己満足できて、遊び集団がより楽しめるようルールについてしっかり話し合わなければならない。また、どんな友達も受け入れられる寛容さやトラブル発生時の素早い対応すら集団遊びをより円滑にしていく一つの能力となる。石田勢津子(1998)によれば、社会性のある子どもは遊びの活動を通して身に付くと述べている。特に、集団遊びを通して、他人との好ましい関係作りが重要となる。

Table 1 遊び能力尺度の因子分析の結果

項	目	因子負荷量
13	遊びのルールなどの話合いで積極的に意見を言いますか	.868
6	あなたは大勢の友達と遊ぶとき、遊び方などを決めるリーダーになりますか	.795
14	遊びの内容をよりみんなが楽しく遊べるよう工夫しますか	.752
9	あなたは遊ぶとき、ルールを守れますか	.839
5	あなたは遊んでいるとき、他の友達が仲間に入れてと言ってきました すぐに答えてあげますか	.785
3	あなたは遊んでいるとき、もめごとがおきました どうしますか	.666

(2) 向社会的行動状況質問紙の因子分析的検討

Table 2 に向社会的行動尺度の因子分析の結果を示す。全対象者のデータに基づいて主成分法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子分析の結果、3 因子解を採用した。

第1因子は、目の前で子どもが飛び出したり、転んだりした場面にすぐに対応することのできる気転の早さや順番を譲るといった寛容さを含んだ行動となる。

第2因子は、病気やけがをしている人や老人をはじめ弱者に対する思いやりという能力となる。

第3因子は、仲間外れやいじめを受けている友達を見かけたときには、勇気をもってそれらの状況から助けてあげることのできる能力となる。

玉瀬耕治(1987)によれば、人は体が健康で心の状態が安定しているときに他人を思いやることができると述べている。やはり、思いやりは好ましい人間関係が成り立つためのもっとも基本的な条件であるという点からも思いやりの心をもてることは重要である。

Table 2 向社会的行動尺度の因子分析の結果

項	目	因子負荷量
10	ころんだ子どもを起こしてやる	.793
18	道路に飛び出そうとする子どもを止める	.740
3	休んだ友達のためにノートをとったり、見せてあげたりする	.683
9	いい物をもったときは、友達や兄弟にも分ける	.661
11	列に並んでいるとき急ぐ人のために順番をゆずる	.545
13	けがをしたり気分が悪くなった人を保健室に連れていく	.880
20	おじいさんやおばあさんの話し相手になる	.772
19	病気になった家族の看病をする	.665
15	けがをした人にハンカチを貸す	.604
7	仲間外れにされている友達を遊びにさそう	.912
12	悪口を言われている人や、いじめられている人をかばう	.780
6	友達に頼まれて友達の代わりに仕事をする	.457

(3) 社会的スキル状況質問紙の因子分析的検討

Table 3 に社会的スキル尺度の因子分析の結果を示す。全対象者のデータに基づいて主成分法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子分析の結果、3 因子解を採用した。

第1因子は、一人で寂しそうにしていたり困っていたりする友達、なにかが上手にできた友達を誉めたりすることのできる優しい心をもった行動がとれる能力となる。

第2因子は、友達の話に心から耳を傾けたり、友達が嫌がる言動は控えたりする行動がとれる能力となる。

第3因子は、友達の失敗を責めたり、友達の話の腰を折ったりしない行動がとれる能力となる。

嶋田洋徳たち(1996)によれば、社会的スキルは、さまざまな経験を通して獲得・習得されると述べている。ただし、例えば、集団遊びの中に入っていく場面でどのように声を掛けて仲間に入れてもらえばよいか分からないというような適切な社会的スキルをもてな

Table 3 社会的スキル尺度の因子分析の結果

項	目	因子負荷量
3	友達が何かをうまくしたときは「じょうずだね」などとほめる	961
17	相手と意見が違ってても、自分の意見を言う	822
2	友達が困っていたら助ける	.770
6	友達が一人で寂しそうなときは声をかける	627
11	自分の意見が違っていてもみんなで決めたことには従う	506
9	自分にも悪いところがあると思ったら「ごめんね」などとあやまる	450
21	友達と会ったら、自分からあいさつをする	446
14	こんなことを言ったら相手に悪いと思うことは言わないようにする	1.006
22	友達と話すときは、話したいことがたくさんある	.796
13	友達の話には「うんうん」とあいづちを打ってよく聞く	625
36	友達が困っていても、ついそのまま、見過ごす	493
33	友達が遊びに入れてほしいと言ってきたら、「うん、いいよ」と答える	934
10	話したいことがあっても、友達の話を終わりまで聞いてから話す	695
27	友達が失敗すると、つい笑ってしまう	688

い子どもや、自分のしたいことが通らなかつたり伝えたいことが友達に十分に伝えられなかつたりする不適切な社会的スキルをもっている子どもに対しては、具体的な指導も重要となる。

4 相関分析

遊び能力・向社会的行動・社会的スキルのそれぞれの関係を検討するために、Pearsonの相関分析を行った。Table 4より、遊び能力、向社会的

Table 4 遊び能力、向社会的行動、社会的スキルの相関関係

	遊び能力	向社会的行動	社会的スキル
遊び能力	1.00	0.46**	0.62**
向社会的行動		1.00	0.92**
社会的スキル			1.00

** p < .01

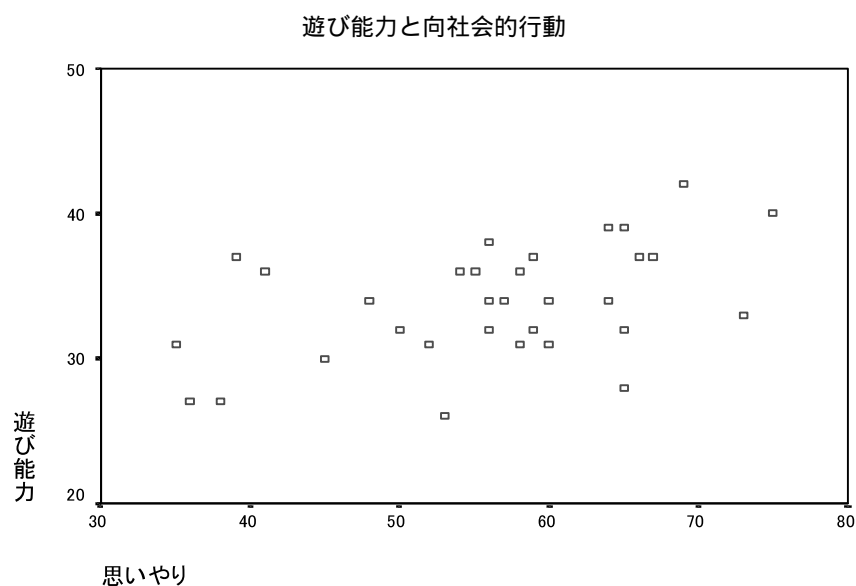


図4 遊び能力と向社会的行動の散分図

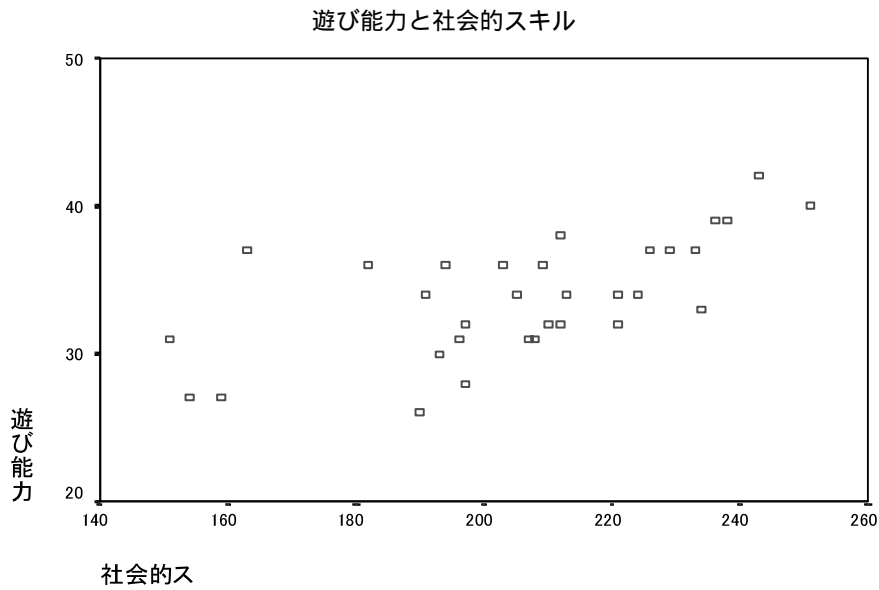


図5 遊び能力と社会的スキルの散分図

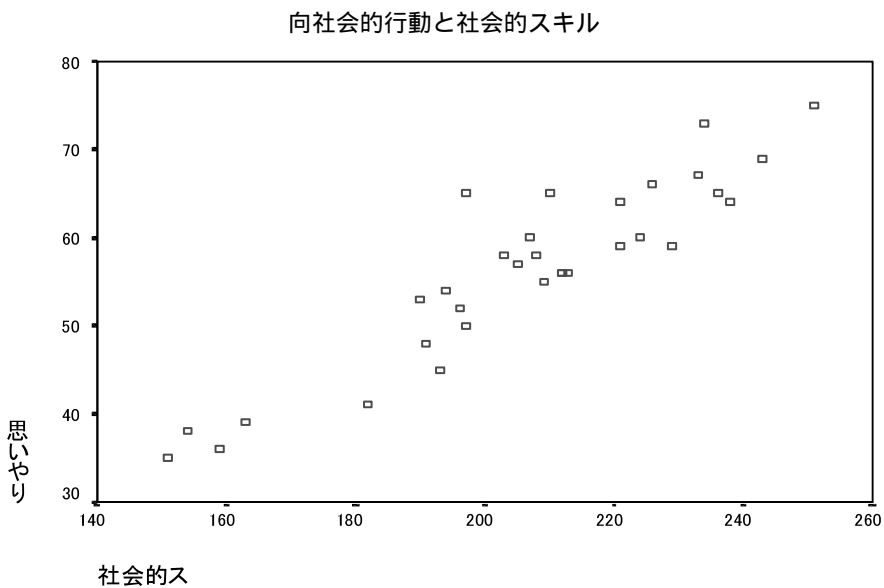


図6 向社会的行動と社会的スキルの散分図

行動，社会的スキルのすべての変数間にはかなりの相関があることが分かった。散分図は図4～6である。これらのことから，遊び能力，向社会的行動，社会的スキルは関連づけて検討すべきであると思われる。

IV ま と め

S校の5年生児童の遊び能力，向社会的行動能力，社会的スキルの概要が明らかになった。それぞれの能力は，過去の成育過程の中でそれなりに培われてきていることや，能力によっては高学年特有の性差もあることが分かった。それは，児童を取り巻く生活環境の違いもあり，

家庭や地域社会の影響を受けていることが推察される。

また、遊び能力、向社会的行動能力、社会的スキルのそれぞれの間には、かなりの相関があることが分かった。すなわち、学校現場において遊びを含めた体験活動を充実させることでさらにそれぞれの能力が高まり、ひいては集団生活により影響をもたらすものと考えられる。それは、学校のみに限らず、家庭や地域社会の中でも保障をする努力が望まれる。

今後は、要因分析をして因果関係を極める。さらに、仲間集団に入れない児童の事例研究もする。

引用文献

- 相川 充・津村 俊充 1996 社会的スキルと対人関係 誠信書房 P.40 - 42
石田勢津子 1995 児童の心理学 有斐閣
菊池 章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店 P.35 - 36 P.40 - 50 P.74
森 琳 1982 幼児の遊び能力形成要因の多変量解析 教育社会学研究第37集 P.95 - 105
坂本 昇一 1978 児童、生徒の人格形成 教育開発研究所
嶋田 洋徳・岡安 孝弘・戸ヶ崎泰子・坂野 雄二 1996 児童の社会的スキル獲得による心理的ストレス緩衝効果 行動療法研究
庄司 一子 1991 社会的スキル尺度の検討 教育相談研究 P.18 - 25
玉瀬 耕治 2000 児童心理 思いやりと共感性 金子書房 P.17 - 22

(付記)

本調査にご協力いただきました関係者の方々に感謝の意を表します。